

小児の口腔習癖の時代的变化

○毛利 元治

所属：もうり小児歯科（福岡市）

【目的】

指しゃぶりなどの口腔習癖は、咬合育成の障害になるが、精神的安定を得る手段としても捉えられている。一方、近年の子どもの生活環境は、都市化や核家族化、共働き家庭の増加など、心理的不安を増す状況が強まっている。

そこで、当院を受診した小児の口腔習癖について、初診時期と年令別の変化を比較検討して日常臨床に役立てたい。

【調査対象と調査方法】

1987年（昭和62年）から（以後A群）と、2012年（平成24年）から（以後B群）の、それぞれ5年間に来院した0歳から11歳の初診患者の問診票を基に調査した。対象となった人数は、それぞれ1876名と601名で、これを、0から2歳群、3から5歳群、6から9歳群、10から11歳群の4群に分けて比較した。

【調査結果】

- 1) 全年令の習癖所持者は、A群39%、B群53%と増加して、複数の習癖を持つ小児の比率も増加していた。
- 2) 年令別では、0～2歳群は37%から53%に、3～5歳群は38%から62%に、6～9歳群は45%から46%に、10～11歳群は33%から51%に増加していた。
- 3) 習癖の種類別でもAB群間で増加が見られ、指しゃぶりが16%から1

8%に、歯ぎしりが12%から18%に、爪かみが8%から11%に、口呼吸が4%から11%に増加して、全年令でも同じ傾向が見られた。

【考察】

当院は小児歯科専門として35年が経過したが、AB群間の25年間の隔たりは親子間の隔たりに近い。また、小児の口腔習癖は心理不安の表現と考えられ、このことは親子間の心理状態の変化と推測される。

従って、歯科診療時に小児は勿論、保護者への対応も現在の社会事情に合わせた配慮が必要と思われる。一方、咬合管理上への習癖の影響を考えた対応が、これまで以上に必要になったと考えられる。

【文献】

- 1) 宮島美樹, 熊澤海道ほか, 3歳児における口腔習癖について - 17年前との比較 -, 小児歯, 小児歯誌, 55(1) : 95-95, 2017.
- 2) 新門正広ほか, 成育歯科を念頭においた新しい問診票の活用 ~第4報 口腔習癖と患児の性格の関連について~, 小児歯誌, 55(1) : 118-118, 2017.